

「…や、文若さん…、痕、残っちゃいます…！」

「つけているのだから仕方がないだろう？」

「…何で」

「どうもお前が私の妻だと、まだ分からない輩がいるようだからな」

分かりやすく印を付けておかないとな、等と言いなから、帯を解いて花の首筋から鎖骨の辺りにも痕を付けていく。

「そんな…私はもう文若さんの…なの…」

そう言うと、胸元に痕をつけるのに夢中になっていた文若の動きがびたりと止まった。どうしたのだろうか。と文若の頭の上に鎮座している頭巾の辺りを見つめていると、この状況に似つかわしくない眉間に皺を寄せた顔を上げられた。

「…あの？」

そんな何か文若を不機嫌にさせるような事を何か言ってしまったのだろうか、自分は。こんなに眉間に皺を寄せられる程の。

「…お前は本当に私を煽るのにかけては三国一だな」
「…え？」

花としては怒らせてしまったのかと心配するも、煽ったつもりなど無いのだから小首を傾げるより他ない。

「まあ、よい。元より既に煽られていたのだからな、こちらは」

そう言うなり、先程既に緩んでいた合わせを左右に開かれて、幾重にも重なる衣を肩から落としてしまう。そうするともう花を守る物は何もなくなってしまう。

その心許なさに胸元を覆うと「何故隠す」とあつさりと手を退かされて、そのまま敷布に縫い止められる。まだ明るい、何もかもが見えてしまうこの状況で全てを晒されてしまうのはかなりの抵抗がある。それなのに文若は花にも見えるように胸の膨らみが始まる辺りにも強く吸い付いて痕を残すのだ。

「…っ」

何故だろう、同じ見える所でも腕や手首ではそれほど気にはならなかったのに、こうして胸元に痕を残される事と言うのは、やけに特別めいたものを感じてしまう。そんな事を思っていると、痕を残す事に夢中に